

移築複製を正式発表

北九州市と地元まちづくり組織

場所、活用法2案を提示

北九州市の開発事業に伴い、取り壊される八幡西区のJR折尾駅について、市と地元まちづくり

組織「おりお未来2協議会」は、現駅舎を移築複製して住民が活用できる施設にする方針で動き出す。両者は今後、体制づくりや資金確保などに取り組む。

6月30日に正式提示された移築場所と活用法2案によると、複製は現駅舎の象徴的な部材のみを再利用し、外観は1916（大正5）年当時を再現。石炭産業の水運から陸運への移行を象徴する歴史的な位置関係を維持



①商業やコミュニティ施設としての活用が考えられる「南口駅前広場付近案」のイメージ図
②図書館や資料館としての活用が考えられる「堀川沿いの歴史公園案」のイメージ図



するため、運河・堀川沿いへの移築を検討。移築場所・活用法は①新折尾駅の南口駅前広場付近で、観光物産コーナーや案内所、催し場として活用②駅から南方約500mに歴史公園として移築。図書館、商業施設、資料館に活用—という。

施設は住民自らで管理運営し、経費も寄付金やテナント料など自主財源で捻出する。折尾駅は日本初の立体交差駅で90年以上の歴史を持つ。大正期の洋風装飾が残り、近代化産業遺産としても評価されている。取り壊しは今年10月以降で、移築は2018年以降となる。

地元学識者からは異論

「新旧調和の開発を」

「価値の調査が必要」

JR折尾駅（八幡西区）検討するべきではないの移築複製に対して、地元学識者からは異論の声が出ている。

九州共立大（八幡西区）の尾道建二教授（建築意匠学）は、「移築複製された施設には、歴史的・文化的な価値はない」と強調し、「スクラップアンドビルドは時代遅れ。現駅舎を生かし、新旧を調和させた開発方法を再

九州国際大（八幡東区）の清水憲二教授（地域経済史）は「市は現駅舎の価値を十分に調査していない」と指摘。「全国でもユニークな駅を本当に失ってよいのか。市の文化財保護審議会での評価、検討するなど手順を踏むべきだ」と話し